

詞的に用ゐられたるものに非ず、「名譽に道に」の義なり、「名」、「名譽」の義なる at を「官」に對せしむるは認め得べきことなりとするも、「道」なる語は「官」「位」何れの語にも對せしめ得べきに非るが如し、されば yol に「道」以外の意義の存したるものなるべきか、暫らく疑を存せんとす。

(23) 此の ät'özi (彼の身) は衍字なるべく、到底此處に用ゐるべきに非ず。

(24) yaqī は yagī, yarī 等と記して現はるゝものと同じく「賊」「敵」の意なり、色・聲・香・味・觸・法の六塵は、また六賊或は六盜とも稱せらるゝものなれば、此處にては即ち此の六塵を指せるものに外ならず。

(25) aša 或は asa. 元來「食ふ」の意にして Kirghiz 語にては「或物を取り入れる」(etwas zu sich nehmen) の意に用ゆることラドロフ氏のトルコ語方言集に見ゆ、此の義より出でゝ此處にてはかく「受」に對せしめたるものなるべし。

(26) 百三十二行の ärür より百六十行の burxanlarning に至る迄は、所々に字句の相違はあれども、ラドロフ氏の Kuan-ši-im Puser 中にも收めらる、而して、此の yükmäk なる語を以て、氏は Čagatai 語の yükmäk と関連せしむ可らず、寧ろ yükmün=禮拜する (sich verneigen, anbeten) の古體ならんと云はれたれど、勿論此處にては「積」なる語を譯したるものにして、Čagatai 語の yükmäk=belasten (Radloff, Versuch d. W. d. Turk-Dialecte), yïghmâq=to collect, to bring together (Shaw, Vocabulary of the L. of E. T.) なる語なりとす、Uigurica, II. 34¹³ に yiq- として見ゆるものも亦た此の語にして、漢語の「積造」に對せしめたり。

(27) ラドロフ氏の Kuan-ši-im Puser 中の此の經の斷片には、ilänür yiltizi に相當する所に ilantuči ärkintäči atlik atli qačixlar と見え、氏は之を譯して die Herrschenden(?) und die Erstarkenden(?) benannten sechs (äusseren) Gefühlseindrücke と記せり、(qačix は六入の「入」の意にして、此の本にては yiltiz 即ち根を以て現はせり、六根も六入も同一の六官を指すこと勿論なり)、然も氏は注して何が故に此の六入に Herrschende, Erstarkende の如き名を付したるかを知らず只だ語義を譯せるのみなりといへり、此の本に見ゆる ilänür の ilän- はラ氏の本に見ゆる ilantuči の ilan- と同語にして、即ち「支配する」の義なり、蓋し根なる語には種々の解釋あれども、要するに増上の義にして「力を持つ」(梵 ind) なる意義を根本とせるものなること疑なし、大毘婆沙論卷百四十二には根の義を説きて「増上・明・現・熹觀・端嚴・最・勝・主」の八義とせり、さればラ氏の本に die Herrschenden und die Erstarkenden benannten sechs Gefühlseindrücke と見ゆるは此の義によれるものなること疑なく、本書に ilänür といへるものも「支配する」「力强き」の意に外ならず。また次の utrurar bälgüši なる語はラドロフ氏によれば ihre anregenden Merkmale の意なりといへど、然も utrurar は既にミューラー氏の Uigurica, II. 5⁴ 及び同書 5¹⁶ にも見るが如く、vollkommen の意に用ゐたるものにして、漢語の「能」に相當し、